〔特別展　普賢菩薩の絵画によせて〕

鳥取・三仏寺所蔵「線刻胎蔵界曼荼羅中台八葉院鏡像」をめぐって
―我が国最古の合掌騎象普賢菩薩像―

鳥取県東伯郡三朝町の郊外、三徳山中に三仏寺はあります。役行者が絶壁のわずかなくぼみに投げ入れたという、投入堂の風雪に耐えた白木の軽やかな造形を思い起こされる方も多いかと思います。ここでは、三仏寺に所蔵される「線刻胎蔵界曼荼羅中台八葉院鏡像」（以下、「三仏寺鏡」）について紹介し、仏教美術史上に占める位置について考えたいと思います。

三仏寺鏡は、直径約28センチメートルの白銅製の鏡です。鏡の背面には花の飾りを施した帯をくわえた二羽の鸚鵡の旋回する様が円形にあらわされます。一方、鏡の表面には胎蔵曼荼羅の中心をなす中台八葉院他が線刻されていますが、左下方に大きく黒色の付着物があり、若干図様が分かりにくくなっています。過去に何らかの原因で火中した可能性もあります。三仏寺では、江戸時代に近郊の土中から発見されたものと伝えられます。以下、線刻の内容について、特に普賢菩薩像を中心としながら検討を加えたいと思います。

鏡面の中央には一際大きく、胎蔵曼荼羅中台八葉院をあらわします。その中心には大日如来を描き、蓮弁上には、上部（東）から右回りに宝幢（東）、開敷華王（南）、無量寿（西）、天鼓雷音（北、痛みのため不明）の四如来が配され、東南から、右回りに文殊（東南）、普賢（南西）、観自在（西北、不明）、彌勒（北東）があらわされるとみられます。但し、持物等が明確に描かれてはおらず、普賢菩薩のみが合掌し象に乗るというそれと判る姿で描かれています。また、通常「東南」にあらわされる普賢菩薩が「南西」に配させる点が注意されます。中台八葉院の上方には天蓋を配し玉状の飾りが垂下します。周囲には天衣を着け飛行する楽器（鼓や笛）を廻らします。鏡面の四隅には華瓶を置き、中台八葉院の外側右下には左手で水瓶を執る十一面観音を、下方、丁度中台八葉院の中心に居る大日如来の真下には左手で如意を執る僧形が小堂のうちにあらわされています。その向って左には供養台があります。十一面観音と相対する左端の尊については痛みのため判然としませんが火焔を配した頭光と右肘の鰭袖を確認でき、天部形と見なせます。

さて、三仏寺鏡の普賢菩薩は、蓮華坐に座し左手で宝剣の載った蓮華茎を執るという胎蔵曼荼羅の通常の姿ではなく、顔を幾分うつむけ合掌思念し、白象に座す形にあらわされます。これは、『法華経』及び『観普賢経』が説く、法華経信仰者のもとに現れ、これを守護する普賢菩薩の姿を示したものです。その代表的な絵像として、我々は東京国立博物館の国宝「普賢菩薩像」の麗しい姿を思い起こします。この合掌思念し白象に乗る普賢菩薩の姿は、我が国の平安時代以降くり返し造形化されたものであり、普賢菩薩のイメージとして広く定着しました。さて『法華経』所説の普賢菩薩の影向を絵画化した我が国最古の作例は、奈良時代の法隆寺金堂壁画です。その普賢菩薩は白象に乗りますが、合掌せずに蓮華茎を執ります。敦煌壁画等においても合掌形は少なく、我が国における合掌形の定着には何らかの強い権威をもつ規範が作用したものとみられます。それは、慈覚大師・円仁（794～864）が唐より請来した「阿蘭若比丘見空中普賢影」という白描の絵像であったようです。最澄（767～822）によって開かれた日本天台宗において『法華経』は、その根本経典とされましたが、その弟子である円仁は在唐中、密教 の修得に励み、法華教学と密教の融合を目指しました。三仏寺鏡の線刻は中台八葉院に『法華経』所説の普賢菩薩像を描くという円仁以降の日本天台宗の教学を象徴した図様といえましょう。また、その周囲に描かれた尊についても、天部形を毘沙門天とすれば、観音とともに円仁の入唐に際し諸難を救った尊であることが知られます（『叡岳要記』）。以上の事から三仏寺鏡の図様は、全体として円仁所縁の尊を集めた感が強いように思われます。十世紀後半の比叡山では、良源（912～85）周辺における円仁顕彰の動きがあったことが知られ、制作母胎の一つに想定されます。

近年、本鏡裏面の鸚鵡と宝相華による文様とほぼ等しいものが施された鏡が中国・紹興において見い出され、三仏寺鏡が越州（紹興）よりの舶載品である可能性が高まりました。これを受けて本鏡の請来に越州で求法した最澄が関与したとの指摘がなされています（松浦正昭氏説）。『叡岳要記』所載の「講堂秘録」には、最澄が比叡山東塔講堂の土中に「胎蔵界之大日」を線刻した七寸の鏡を埋納したことが記されており、三仏寺鏡との関係が注目されます。一方、その鏡は、義真（781～833）の代に講堂本尊の胎内に納められ、講堂焼失の度に灰中から救い出されたことがあわせて記録されています。三仏寺鏡に損傷があることも想起されます。さて、三仏寺鏡には「長徳三年九月廿日

女弟子平山本願也」との刻銘があり、本鏡の線刻が、少なくとも長徳三年（997）迄にはなされていたことが知られます。そして、このことは本鏡の合掌騎象の普賢菩薩像が現存最古の基準作であることを示します。「女弟子平山」については、現時点では明確に出来ませんが、本鏡の図様の形成に関わるとみられる良源以降、比叡山と藤原摂関家が深いつながりを有するようになることを考慮すると、宗祖にゆかりのあるとみられる鏡を手にすることが出来たような、藤原氏に連なる高位の女性の発願によって本鏡の供養が行われたと考えられます。（増記隆介）

線刻胎蔵界曼荼羅中台八葉院鏡像

同背面

同部分（普賢菩薩）

同部分（銘文）

季刊 美のたより №148
平成16年10月 9 日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.